



樹蔭静け

北海道帯広三条高等学校
〒080-2473
北海道帯広市西23条南2丁目12番地
TEL：0155（37）5501
発行日 令和5年11月30日

日々の努力の積み重ねが結実 ～ 部活動で輝く三条生



合唱部、7年振りの全国金賞

先月香川県で開催された第76回全日本合唱コンクール全国大会Aグループ部門において、本校合唱部が金賞を獲得、さらに2位にあたる香川県知事賞も受賞しました。顧問である豊田端吾教諭は「北海道予選で審査員全員そろっての1位評価でしたので、もしかすると、と思って臨んだ全国大会でしたが素晴らしい演奏を披露してくれました」と振り返ってくれました。部長の佐々木楓乃さんは「成績発表の時に三条の名前を聞いたときは震えました。本当に嬉しかったです」と話してくれました。この大会を最後に3年生は引退。後を継ぐ1・2年生たちがまた日々練習に励んでいます。

演劇部、初の全道最優秀賞 来年の総文祭の切符掴む

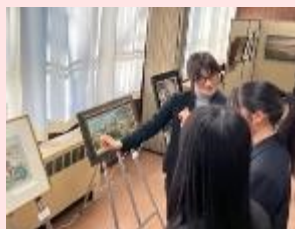
17～20日に帯広市民文化ホールで開催された道高文連の第73回全道高校演劇発表大会で、演劇部が最優秀賞を獲得し、来年度の全国総合文化祭出場を決めました。演劇部は現在、部員数4名。裏方の人手が足りず、顧問の井出英次教諭が音響を担当してい

ました。十勝支部大会終了後にも脚本に手を加えながら、それぞれの演技や演出などの完成度をあげるよう最後まで取り組みました。初めての全道大会に緊張も最高潮に達したままの公演でしたが、最優秀賞という結果に、一同びっく。藤原さんは「トロフィーを受け取る手が震えていました」と振り返ります。来年度岐阜で行われる総文祭に出場が決定したことに、部長の石田さんは「全国では裏方から全てにおいて生徒たちでやらなければならないので、新入部員募集中です！」と話していました。4人で掴んだ全国切符。これからも頑張ってください。

女子スケート2人、世界ジュニアW杯へ

スケート部河原莉緒さんと小島楓さんの二人はイタリア開催されるジュニアワールドカップ第1戦と第2戦の選手として派遣されています。二人とも初めての海外遠征ということで戸惑いながらも準備を進め、元気に帯広を発ちました。第1戦は、河原さんが1000mで見事3位、小島さんがチームパシュート4位となりました。第2戦は今週末に行われます。

今年も三条美術館開催



3年選択教科『自己表現』の授業で帯広美術館と連携した「対話型鑑賞」の授業を行いました。この方法はMoMA（ニューヨーク近代美術館）で開発された鑑賞法で、自分の感覚に気づき、それを表現する力、さらに他者の想いを受容し理解する能力を向上させるものとして知られています。今年も、とかち芸術文化振興機構代表の松井由孝さんから絵画をお借りし、帯広美術館学芸課長の齊藤千鶴子さんに授業をしていただきました。飛び入りで松井さんも授業に参加する場面もあり、生徒たちの感性を大いに刺激していただきました。13日～17日の昼休みには、絵画を展示している会議室を三条美術館として全校生徒に自由に見てもらえるようにし、美術に触れる貴重な機会となりました。関係の皆さん、本当にありがとうございました。

10月の節電運動、目標達成ならず！

昨年に引き続き、独自の節電運動～必要のない電気は消しましょう！～を展開しています。昨年は前年度比マイナス10%を目標に掲げ、ほぼ目標を達成しました。今年度は昨年並みを目標としてきましたが、10月の結果は残念ながら目標は達成できませんでした。必要の無い電気はこまめに消す習慣を身につけましょう。放課後の教室が誰もいないのに煌々と明かりがついていることも見受けられます。教室を最後に出る人が電気を消すようにしてください。こうした積み重ねが本校のみならず、北海道ひいては地球のためになるという意識をもってもらいたいと思います。ご協力お願いします。

	10月
一昨年度	17,785kWh
目標(昨年度並)	14,136kWh
今年度	15,093kWh

第33回 1-4担任・演劇部顧問 井出英次教諭

演劇は壮大な実験。それが面白い！

◇一つの芝居で生徒は変わる

今回の演劇脚本は前任校の柏葉高校時代に書いていたもの。タイトルの「つぶあんチーズ」は、言わずと知れたあの店のものです。三条に異動してきて演劇部をもたせてもらい、今回、生徒たちに「こんなことがあるんだけど、どう？」と見せたら「やりましょう」と言ってくれたのでやることになりました。

演劇といっても、高校演劇が好きなのですが、僕は演劇は壮大な実験だと思っています。今回の演劇も大人しくて口数もそんなに多くない子と逆に活発で元気な子が会ったらどんな風になるのかという実験です。演じる生徒自身も、一つの芝居に取り組んでいく中でどんどん変わっていきます。それが本当に面白い。もちろん今回もそうで、特に1年生はどんどん変わっていくのが手にとるようにわかりました。そして掴んだのが全国の切符です。こんな劇的なことってそんなにないと思います。

◇演劇との出会い

僕の歳の離れた姉が高校で演劇をやっていました。それを見て面白いなあと子ども心に覚えていて、自分も本別高校で演劇部に入りました。そして1年の時の高文連で、柏葉高校の演劇を見たときに衝撃を受けました。幕があくとアパートの一室が完全に再現されていてそのリアリティーにショックを受けました。それから「打倒、柏葉」を合い言葉に頑張って、3年の時に自分の書いた脚本でその夢を果たすことができました。地元の本別空襲を題材にしたものでした。

大学でも演劇をやろうと思っていたのですが、ミュージカルのサーク

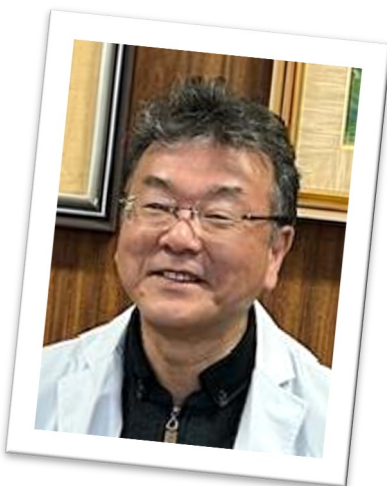
ルしがなく、なぜここで歌わなくてはならないのかと思ってやめてしまいました。

教員になって赴任した1校目も2校目も演劇部がない高校でした。それでも何とか部を立ち上げて生徒と一緒に演劇を楽しんできました。その間、何度か全道へも出場しました。そして3校目の高校で全道優勝を果たすことができました。ところが全国総文祭に出場するという段になって開催県で口蹄疫が発生。十勝の高校生は出場をとりやめることになってしまいました。仕方のないこととはいえ、本当に苦しく悲しい決定でした。来年、何事もなく総文祭に出場できることを心から望みます。

◇色んなことにチャレンジしてほしい

三条高校生は本当に素直です。勉強に部活動に真面目に取り組んでいます。僕自身、授業に行くのが本当に楽しいです。そうとはいえ、授業に勉強に部活動にと、とても忙しい日々を過ごしているのだと思います。自分の高校生の時もそうでしたけど、高校生というのは人生で一番忙しい時期なのかもしれません。でも可能性は無限にあるのは間違いないですから、色んなことにチャレンジしてほしい。忙しくてもそれがいつか必ず活きてきます。

えっ、次の芝居ですか？これから部員たちと考えていきます。



インタビュー

キラリ

高文連全道演劇発表大会最優秀賞を獲得！

2年5組 石田 紗菜 さん 2年4組 藤原みのり さん
1年1組 和田 一花 さん 1年2組 若原 六花 さん



全道大会で最優秀賞を獲得し、来年の全国総文祭の出場を決めた演劇部4人に話を伺いました。初めに最優秀賞獲得を振り返ってもらった部長の石田さんは「色んな人に助けてもらっていた賞です。何か一つでも欠けたらこの結果にはなりません。先輩がいたから続けてこれたし、井出先生がきて、後輩たちも入部してくれて、放送局の人たちも手伝ってくれて…。巡り合わせてすごいですね」としみじみ。副部長の藤原さんが続けて「見に来てくれる人たちがいてこそです。一人でも（観客が）いたら、そこが舞台！」名言です。1年の和田さんは「全道の舞台は私自身は正直言って不完全燃焼で不安な部分もありましたが、結果を聞いて震えが止まりました」。一方、舞台監督を務めた若原さんは「地区大会の経験を踏まえて、全道では自分の役割をしっかりと果たせたかなと思っていましたが、最優秀という結果を聞いても現実味がありませんでした」と話してくれました。

3人で1時間ほどのお芝居ですから、それだけ台詞が多いということですが、その苦勞を聞くと、石田さんは「最初は役を決めずにみんなで脚本を読んでいきます。役を変えながら読んで、登場人物の設定を把握していくのです。ですから結局、全部台詞を覚えてしまうんです」。和田さんも「台詞覚えはそんなに苦勞はしませんでした。それより私の場合マスクをしている設定なので、声をはっきり観客に届けるのが課題でした」。さすがです。役のキャラ設定もそれぞれ工夫しているようで、藤原さんは「私は教師役なのですが、やさしく生徒を見守っている先生らしさと学校祭ではじけるという2面性をどう演じるかがポイントでした。インパクトを残したいなあと考えて、最初は抵抗感もありましたが、思い切ってやってみるととても楽しい役でした」と振り返ります。

演劇の魅力について、石田さんは「普段できないことを舞台ではできることが魅力です。見るもの全てが新鮮に感じられます」。若原さんは「演劇は役を演じるだけではなくて、はるかに色んなことができる部活動です」と強調します。確かに演出、衣装、大道具、舞台音楽など色々あります。出場が決まった来年の全国総文祭は、裏方の全てを部員がやらなくてはならないそうなので、部員募集に力を入れたいとのこと。何かを始めるのに遅すぎるということはありません。そのあなた、どうですか？ちなみに総文祭は岐阜県での開催です。